

筑波大学体育専門学群生のドーピング意識調査の結果報告(2006年度)

近藤良享・長谷川悦示

**Report on the actual circumstances of students' anti-doping views in
Undergraduate School of Health and Physical Education,
University of Tsukuba (2006)**

KONDO Yoshitaka, HASEGAWA Etsushi

I. はじめに

スポーツ界がアンチ・ドーピング運動をますます強化することを踏まえ、国際的にも国内的にも日本のスポーツ界、大学スポーツ界を主導する筑波大学体育専門学群の学生が、どのようなドーピングに対する意識、考え方、現状であるかについて把握することが不可欠となっている。そのため本学体育専門学群生に対して、初めて2004年度に「ドーピング意識調査」を実施し、今回の2006年度が第2回目となる。

この調査の目的は、筑波大学体育専門学群生のドーピング意識についての現状把握を行うと共に、調査への回答を通じて、本学群生のアンチ・ドーピングに対する意識向上を図ることを目的にした。また、前回の2004年4月に実施した初めての意識調査結果とも比較検討し、体育専門学群におけるアンチ・ドーピングへの取り組みについての基礎資料を得ることにした。

II. 調査方法

1. 調査内容

「アンチ・ドーピングに対する意識調査」の質問は、所属競技団体名、性別、学年、競技レベルといった基礎項目に続き、ドーピングへの関心の度合い(以下、関心の度合い)、当該競技種目における禁止薬物が使用される可能性(以下、薬物使用の可能性)、ドーピングに対する信条(以下、ドーピング観)、ドーピング検査の方針や手順についての情報(以下、ドーピングの情報)、サプリメント摂取とドーピング違反の可能性(以下、サ

プリメントとドーピング)、ドーピング検査回数について、10の質問で構成された。

調査は以下のとおりである。

Q1 あなたが活動する競技名は？

Q2 あなたの性別は。

(1)男性 (2)女性

Q3 あなたの学年は。

(1)1年生 (2)2年生 (3)3年生 (4)4年生

Q4 あなたの競技レベルについて伺います。現在までにあなたが出場した最も高いレベルの大会はどれですか。

(1)オリンピック・世界選手権レベル (2)全国大会レベル (3)都道府県大会レベル (4)市町村大会レベル (5)その他(レクリエーション等)

Q5 ドーピング禁止薬物使用問題について、どのくらい関心がありますか。

(1)非常に関心がある (2)かなり関心がある (3)少し関心がある (4)まったく関心がない

Q6 国際的に見て、あなたの競技種目で競技力向上のために薬物(ドーピング禁止薬物)が使用される可能性はどのくらいあると思いますか。

(1)使用される可能性は非常に高いと思う (2)使用される可能性は高いと思う (3)使用される可能性はわからない (4)使用される可能性は低いと思う (5)使用される可能性はないと思う

- Q7 競技力向上のための薬物(ドーピング禁止薬物)使用について、あなた自身の考えや気持ちを表現するものとして、以下のどの信条が最も適切だと思いますか。
- (1)いかなる状況下でも、競技力向上の薬物使用は間違っていると思う (2)状況次第で、競技力向上の薬物使用を判断すべきだと思う (3)いかなる状況下でも、競技力向上の薬物使用はかまわないと思う
- Q8 あなたはドーピング検査の方針や手順についてどのくらい情報を得ていますか。
- (1)まったくなし (2)少しある (3)ある程度、得ている (4)相当に得ている (5)十分に得ている
- Q9 あなたは栄養食品・エネルギー補助食品(サプリメント)の摂取がどのくらいドーピング検査の陽性(ドーピング違反)に結びつく可能性があると思いますか。
- (1)可能性は大きい (2)ある程度の可能性がある (3)可能性は小さい (4)可能性はまったくない (5)わからない
- Q10 あなたが、2004年1月1日～2005年12月31日の2年間に受けたドーピング検査の回数は何回ですか。

2. 調査手順および回収結果

実施方法については、以下の手順であった。1年生は2006年4月11日の新入生オリエンテーションの時間、2、3、4年生は、2006年4月12日の学年別ガイダンスにおいて、近藤が調査目的を説明して、調査用紙を配布し、その場での回答もしくは後日の提出を指示した。後日の調査用紙の回収期間は、2006年4月12日から同4月30日までとした。

回収率は、1年生の在籍数249名のうち234名が回答し、回答率は94.0%であった。2年生の在籍数255名のうち236名が回答し、回答率は92.5%であった。3年生の在籍数256名うち203名が回答し、回答率は79.3%であった。4年生の在籍数295名のうち185名が回答し、回答率は62.7%であった。体育専門学群全体では、在籍者数1,055名のうち858名が回答し、回収率は81.3%であった。

3. 分析方法

入力および統計処理は、プライバシーへの配慮

から、業者に委託して個人が特定されないようにした。

III 2006年度の調査結果(表1-5参照)

- (1)所属競技団体数と回答者数：回答者が所属する競技団体数は32競技団体で、回答者総数は861名だった。
- (2)性別：861名のうち、男子学生が601名(69.8%)で、女子学生が260名(30.2%)であった。
- (3)学年区分：1年生が233名(27.0%)、2学年が240名(27.9%)、3学年が201名(23.3%)、4学年が187名(21.7%)であった。
- (4)競技レベル：オリンピック・世界選手権レベルが36名(4.2%)、全国大会レベルが464名(53.9%)、都道府県レベルが314名(36.5%)、市町村レベルが30名(3.5%)、その他が15名(1.7%)、無記入が2名(0.2%)であった。
- (5)関心度合い：「非常に関心がある」は、96名(11.2%)、「かなり関心がある」は、234名(27.2%)、「少し関心がある」は、480名(55.8%)、「まったく関心がない」は50名(5.8%)、「無回答」が1名であった。
- (6)薬物使用の可能性：国際的な視野からのドーピングの可能性について、「使用される可能性は非常に高いと思う」は、167名(19.7%)、「使用される可能性は高いと思う」は、297名(35.0%)と回答し、また、「使用される可能性はわからない」は、174名(20.5%)、「使用される可能性は低いと思う」は、171名(20.1%)、「使用される可能性はないと思う」は、40名(4.7%)、「無回答」が12名であった。
- (7)ドーピング観：ドーピングについての信条として、「いかなる状況下でも、競技力向上の薬物使用は間違っていると思う」と回答したのは、648名(76.3%)、「状況次第で、競技力向上の薬物使用を判断すべきだと思う」は、191名(22.5%)、「いかなる状況下でも、競技力向上の薬物使用はかまわないと思う」は、10名(1.2%)、「無回答」は、12名あった。
- (8)ドーピングの情報：検査の方針、手順といったドーピング情報に関して、「まっ

たくなし」は、105名(12.4%)、「少しある」は、417名(49.1%)、「ある程度、得ている」は、268名(31.6%)、「相当に得ている」は、40名(4.7%)、「十分に得ている」は、

19名(2.2%)、「無回答」は、12名であった。
(9)サプリメントとドーピング：補助食品・サプリメントの使用によってドーピング検査で陽性となる可能性について、「可

表1 「関心の度合い」についての回答

Q1. 関心の度合い	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	1年	2年	3年	4年	個人種目	団体種目	オリンピック・ 世界選手権	全国 レベル	都道府県
非常に関心	11.2%	12.0%	9.2%	9.8%	16.9%	8.9%	8.1%	13.3%	8.5%	22.2%	10.6%	10.2%
	96	72	24	23	40	18	15	42	39	8	49	32
	100.0%	75.0%	25.0%	24.0%	41.7%	18.8%	15.6%	51.9%	48.1%	9.0%	55.1%	36.0%
かなり関心	27.2%	26.3%	29.2%	26.5%	29.2%	25.6%	27.6%	30.7%	26.0%	30.6%	28.0%	25.6%
	234	158	76	62	69	52	51	97	120	11	130	80
	100.0%	67.5%	32.5%	26.5%	29.5%	22.2%	21.8%	44.7%	55.3%	5.0%	58.8%	36.2%
すこし関心	55.8%	55.0%	57.7%	60.7%	50.4%	57.6%	54.6%	50.0%	59.7%	27.8%	55.8%	59.4%
	480	330	150	142	119	117	101	158	275	10	259	186
	100.0%	68.8%	31.3%	29.6%	24.8%	24.4%	21.1%	38.5%	63.5%	2.2%	56.9%	40.9%
全くない	5.8%	6.7%	3.8%	3.0%	3.4%	7.9%	9.7%	6.0%	5.9%	19.4%	5.6%	4.8%
	50	40	10	7	8	16	18	19	27	7	26	15
	100.0%	80.0%	20.0%	14.3%	16.3%	32.7%	36.7%	41.3%	58.7%	14.6%	54.2%	31.3%
合計	100.0%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
	860	600	260	234	236	203	185	316	461	36	464	313
	100.0%	69.8%	30.2%	27.3%	27.5%	23.7%	21.6%	36.8%	53.7%	4.4%	57.1%	38.5%

表2 「薬物使用の可能性」についての回答

Q2. 薬物使用の 可能性	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	1年	2年	3年	4年	個人種目	団体種目	オリンピック・ 世界選手権	全国レベ ル	都道府県
非常に高い	19.7%	21.8%	14.6%	16.3%	24.3%	22.0%	15.6%	27.3%	14.2%	20.0%	18.2%	22.1%
	167	130	37	38	57	44	28	85	65	7	83	69
	100%	77.8%	22.2%	22.8%	34.1%	26.3%	16.8%	56.7%	43.3%	4.4%	52.2%	43.4%
高い	35.0%	37.1%	30.0%	30.9%	32.8%	33.0%	45.3%	34.1%	35.7%	25.7%	33.8%	36.9%
	297	221	76	72	77	66	81	106	163	9	154	115
	100%	74.4%	25.6%	24.3%	26.0%	22.3%	27.4%	39.4%	60.6%	3.2%	55.4%	41.4%
わからない	20.5%	18.8%	24.5%	30.0%	18.3%	18.5%	13.4%	15.1%	24.7%	28.6%	20.2%	19.6%
	174	112	62	70	43	37	24	47	113	10	92	61
	100%	64.4%	35.6%	40.2%	24.7%	21.3%	13.8%	29.4%	70.6%	6.1%	56.4%	37.4%
低い	20.1%	19.0%	22.9%	19.3%	20.4%	21.0%	19.6%	17.4%	22.1%	17.1%	22.4%	17.9%
	171	113	58	45	48	42	35	54	101	6	102	56
	100%	66.1%	33.9%	26.5%	28.2%	24.7%	20.6%	34.8%	65.2%	3.7%	62.2%	34.1%
ない	4.7%	3.4%	7.9%	3.4%	4.3%	5.5%	6.1%	6.1%	3.3%	8.6%	5.3%	3.5%
	40	20	20	8	10	11	11	19	15	3	24	11
	100%	50.0%	50.0%	20.0%	25.0%	27.5%	27.5%	55.9%	44.1%	7.9%	63.2%	28.9%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
	849	596	253	233	235	200	179	311	457	35	455	312
	100%	70.2%	29.8%	27.5%	27.7%	23.6%	21.1%	40.5%	59.5%	4.4%	56.7%	38.9%

表3 「ドーピング観」についての回答

Q3 ドーピング観	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	1年	2年	3年	4年	個人種目	団体種目	オリンピック・世界選手権	全国レベル	都道府県
無条件で使用は悪い	76.3%	76.8%	75.2%	86.2%	71.4%	72.4%	73.7%	80.4%	73.7%	71.3%	75.0%	79.1%
	648	457	191	201	168	145	132	250	336	25	341	248
	100%	70.5%	29.5%	31.1%	26.0%	22.4%	20.4%	42.7%	57.3%	4.1%	55.5%	40.4%
状況次第で判断すべき	22.5%	21.7%	24.4%	12.4%	27.2%	27.0%	24.6%	19.3%	24.3%	28.5%	23.5%	19.5%
	191	129	62	29	64	54	44	60	111	10	107	61
	100%	67.5%	32.5%	15.2%	33.5%	28.3%	23.0%	35.1%	64.9%	5.6%	60.1%	34.3%
無条件でかまわない	1.2%	1.5%	0.4%	1.3%	1.3%	0.5%	1.7%	0.3%	2.0%	0.0%	1.3%	1.3%
	10	9	1	3	3	1	3	1	9	0	6	4
	100%	90.0%	10.0%	30.0%	30.0%	10.0%	30.0%	10.0%	90.0%	0.0%	60.0%	40.0%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
	849	595	254	233	235	200	179	311	456	35	455	313
	100%	70.1%	29.9%	27.5%	27.7%	23.6%	21.1%	40.5%	59.5%	4.4%	56.6%	39.0%

表4 「ドーピングの情報」についての回答

Q4 ドーピングの情報	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	1年	2年	3年	4年	個人種目	団体種目	オリンピック・世界選手権	全国レベル	都道府県
全くない	12.4%	13.9%	8.7%	20.1%	7.7%	11.5%	9.5%	8.1%	14.9%	8.6%	10.8%	15.1%
	105	83	22	47	18	23	17	25	68	3	49	47
	100%	79.0%	21.0%	44.8%	17.1%	21.9%	16.2%	26.9%	73.1%	3.0%	49.5%	47.5%
少しある	49.1%	48.8%	49.8%	53.0%	46.6%	49.0%	47.5%	41.9%	53.0%	42.9%	46.8%	51.6%
	417	291	126	124	109	98	85	130	242	15	213	161
	100%	69.8%	30.2%	29.8%	26.2%	23.6%	20.4%	34.9%	65.1%	3.9%	54.8%	41.4%
ある程度得ている	31.6%	31.0%	32.8%	22.2%	39.3%	30.0%	35.2%	39.4%	27.8%	37.1%	34.5%	28.5%
	268	185	83	52	92	60	63	122	127	13	157	89
	100%	69.0%	31.0%	19.5%	34.5%	22.5%	23.6%	49.0%	51.0%	5.0%	60.6%	34.4%
相当得ている	4.7%	4.5%	5.1%	3.4%	4.7%	7.0%	3.9%	6.5%	3.5%	5.7%	4.8%	4.2%
	40	27	13	8	11	14	7	20	16	2	22	13
	100%	67.5%	32.5%	20.0%	27.5%	35.0%	17.5%	55.6%	44.4%	5.4%	59.5%	35.1%
十分に得ている	2.2%	1.7%	3.6%	1.3%	1.7%	2.5%	3.9%	4.2%	0.9%	5.7%	3.1%	0.6%
	19	10	9	3	4	5	7	13	4	2	14	2
	100%	52.6%	47.4%	15.8%	21.1%	26.3%	36.8%	76.5%	23.5%	11.1%	77.8%	11.1%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
	849	596	253	234	234	200	179	310	457	35	455	312
	100%	70.2%	29.8%	27.6%	27.6%	23.6%	21.1%	40.4%	59.6%	4.4%	56.7%	38.9%

能性は大きい」と回答したのは、104名(12.3%)、「ある程度の可能性がある」は、465名(54.8%)、「可能性は小さい」は、185名(21.8%)、「可能性はまったくない」は、33名(3.9%)、「わからない」は、61名(7.2%)、「無回答」は、13名であった。

(10)ドーピングの検査有無：2004年1月1日～2005年12月31日の2年間に受けたドーピング検査の回数について、「1回以上ある」と回答したのは、34名(3.9%)、「ない」が805名(93.5%)、無回答が22名(2.6%)であった。

表5 「サプリメントのドーピングの可能性」についての回答

Q5. サプリメントの ドーピングの可 可能性	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	1年	2年	3年	4年	個人種目	団体種目	オリンピック 世界選手権	全国 レベル	都道府県
可能性は 大きい	12.3%	12.8%	11.1%	6.4%	16.2%	15.7%	11.2%	11.6%	12.1%	8.6%	12.6%	12.8%
	104	76	28	15	38	31	20	36	55	3	57	40
	100%	73.1%	26.9%	14.4%	36.5%	29.8%	19.2%	39.6%	60.4%	3.0%	57.0%	40.0%
ある程度の可 能性がある	54.8%	52.9%	59.5%	48.7%	51.5%	58.1%	63.1%	56.5%	53.9%	60.0%	55.6%	53.4%
	465	315	150	114	121	115	113	175	246	21	252	167
	100%	67.7%	32.3%	24.6%	26.1%	24.8%	24.4%	41.6%	58.4%	4.8%	57.3%	38.0%
可能性は 小さい	21.8%	22.7%	19.8%	28.2%	23.8%	16.7%	16.8%	21.0%	22.1%	14.3%	19.9%	24.9%
	185	135	50	66	56	33	30	65	101	5	90	78
	100%	73.0%	27.0%	35.7%	30.3%	17.8%	16.2%	39.2%	60.8%	2.9%	52.0%	45.1%
可能性は 全くない	3.9%	4.2%	3.2%	6.4%	3.0%	3.0%	2.8%	3.2%	4.6%	0.0%	4.6%	3.5%
	33	25	8	15	7	6	5	10	21	0	21	11
	100%	75.8%	24.2%	45.5%	21.2%	18.2%	15.2%	32.3%	67.7%	0.0%	65.6%	34.4%
わからない	7.2%	7.6%	6.3%	10.3%	5.5%	6.6%	6.1%	7.7%	7.2%	17.1%	7.3%	5.4%
	61	45	16	24	13	13	11	24	33	6	33	17
	100%	73.8%	26.2%	39.3%	21.3%	21.3%	18.0%	42.1%	57.9%	10.7%	58.9%	30.4%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
	848	596	252	234	235	198	179	310	456	35	453	313
	100%	70.3%	29.7%	27.7%	27.8%	23.4%	21.2%	40.5%	59.5%	4.4%	56.6%	39.1%

IV. 2006年度の特徴と課題～まとめにかえて

2006年度の筑波大学体育専門学群生への「アンチ・ドーピングの意識調査」から幾つの特徴や課題を出してみると以下のようになる。

1. 調査結果に見られる特徴

表1の「関心の度合い」について、「非常に関心がある」と回答した学年別集計の中で、2学年が他の学年に比べて強い関心を示している点や、個人種目が団体種目に比べて強い関心を示している点が特徴的である。また、当然のことながら競技レベルの高い、オリンピック・世界選手権出場レベルでは、他のレベルより、関心の高さが示されている。

表2の「薬物使用の可能性」について、「わからない」と回答した学年別集計の中で、1学年が4割余もあり、ドーピング問題についての知識が不足している可能性が示唆される。

表3の「ドーピング観」について、学年別集計の中で、1年生は、「無条件で使用は悪い」と86%余が回答し、学年があがるほど、「状況次第で判断すべき」との回答が増えていく。これは、ドーピング問題にも多種多様な事例が存在し、すべての事例を一括して価値判断できない状況を示してい

ると考えられる。

表4の「ドーピングの情報」について、学年別集計の「全くない」と回答した1学年が20%以上もあり、他の学年の2倍強を示している。2学年以上になると、「ある程度得ている」、「相当に得ている」と回答した学生が6割以上いる。また、個人種目と集団種目の結果から、やはり、個人種目の方が集団種目よりもドーピングに関する情報が多く伝えられているようである。それは、「ある程度得ている」、「相当得ている」、「十分に得ている」を合計した場合、個人種目は5割を越えるが、集団種目は3割程度である。確かに、集団種目の検査対象は入賞チームの選手全員を行うわけではないので、比較的情報量が不足しているかもしれないが、検査対象になる可能性がないわけではなく、情報伝達は重要であろう。

表5の「サプリメントのドーピングの可能性」について、1学年が「可能性が大きい」サプリメントがあることを知らず、その点は、「可能性が全くない」や「わからない」の回答者の多さに表れている。サプリメントの中には禁止物質が含まれた製品もあるという正しい情報提供が必要であろう。

2. 調査結果からの課題

まず、ドーピング観について、「いかなる状況下でも、競技力向上の薬物使用は間違っていると思う」と回答した体専学生が、JADA調査の選手よりも13%も下回っているし、同じく「状況次第で、競技力向上の薬物使用を判断すべきだと思う」が10%近くも上回っていることから、やはりドーピング問題への正しい理解、信条が不十分ではないかと懸念される。「ドーピングはかまわない」とする回答学生も10名おり、2004年の調査とほとんど変化が見られないことから、今後のアンチ・ドーピング教育の最重要課題となるだろう。

次に課題としてあげられるのは、ドーピングに関する知識・情報をどのように提供するかという問題ある。調査結果からみると前回とほとんど変化がみられないことから、体育専門学群における学生・選手へのアンチ・ドーピング教育、啓蒙が十分であるとは言えないだろう。特に、オリンピック・世界選手権クラスの選手の中で、ドーピングの情報が「全くない」と「少しある」と回答した者が5割を越えている点は大きな問題である。情報量の多寡には個人差があるかもしれないが、少なくともドーピング対象になる可能性が高い選手には十分な知識を提供することは不可欠であろう。

他方、第1回の2004年の調査との比較では、「サプリメントのドーピングの可能性」については、かなり意識改善が見られた。それは、サプリメントの中にも禁止薬物が含有している可能性があることを知っている回答が増加した点に見られる。サプリメントであっても不用意な使用がドーピングにつながることを知識として獲得できつつあるようである。

2005年10月には、ユネスコ(第33回ユネスコ総会)において、アンチ・ドーピング国際条約が提示され、我が国においても2007年2月に批准すると報道されている。こうした国際条約が発効(30カ国が受諾した翌月の1日発効)することによって、今後、世界のアンチ・ドーピング活動がWADAや各国の政府関係者らによって、ますます活発化すると同時に、規則の改定、禁止薬物の追加・削除等の改訂も予想される。

最新のドーピング関連情報を定期的に、各競技団体はもとより、現場で直接指導にあたるコーチ・スタッフへの伝達も不可欠だろう。無知によるドーピング違反は選手生命に響く重大な過失となる。未然に防ぐ方法がある以上、できる限り速やかに情報が届くようなシステムを策定する必要がある。

筑波大学体育専門学群生を初めとする体育・スポーツ系の大学生に関しては、選手としてだけではなく将来の指導者(教員、コーチなど)としても、アンチ・ドーピングの意識レベルを向上させなければならない。体育・スポーツ系教育機関のミッションとして、体育・スポーツ系の大学生には、顧問教官、コーチングスタッフらだけに依拠するのではなく、例えば、教育課程の中に「アンチ・ドーピング」といった授業科目を開設したり、教育課程の時間外の運動部活動においても、アンチ・ドーピングのセミナー、講演会などを積極的に実施、支援することが必要であろう。アンチ・ドーピング運動は、規制・罰則強化と「教育・啓蒙活動」が車の両輪となって展開されることが重要である。

この調査は平成17年度文部科学省科学研究費補助金、基盤研究B(研究代表者、近藤良享：課題番号17300192)の一部である。

参考資料

(財)日本アンチ・ドーピング機構倫理・教育委員会(2003):日本のトップアスリートを対象とするアンチ・ドーピングに関する意識調査～第1報、平成15年度日本アンチ・ドーピング機構調査研究報告書、pp.1-17.

近藤良享, 長谷川悦示:筑波大学体育専門学群生のドーピング意識調査結果(2004年度)筑波大学体育科学系紀要, 28:191-198, 2005.

近藤良享:薬物ドーピング防止教育プログラムの開発と啓蒙、平成14年度～16年度科学研究費補助金(基盤研究(B))(2)研究成果報告書、pp.1-134, 2005.